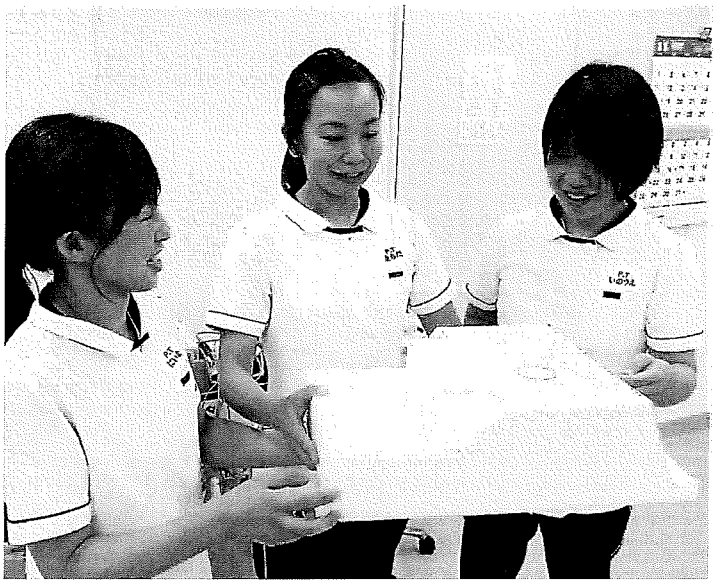
2018年10月31日 読売大阪 朝刊 阪神 13S版 29頁

耳の褥瘡 個別に対応

読売療育賞敢闘賞 西宮すなご医療福祉センター

重症心身障害者施設で働く職員の優れた実践研究を表彰する「第14回読売療育賞」（読売光と愛の事業団主催）の敢闘賞に、西宮すなご医療福祉センター（西宮市武庫川町）が選ばれた。同センター研究チームの理学療法士町田幸さん(39)は「入所者の生活の中から問題点を見つけ、改善につなげることができてよかった」と喜びを語った。（三枝泰子）



町田さん（中央）ら研究チームのメンバーは、クッションをうまく使うことで、褥瘡の再発防止に役立てた（西宮市で）

同センターは、重度の知的障害と肢体不自由が重複する、6歳から76歳までの約180人が入所している。

研究チームのメンバーは町田さんら5人。寝たきりで体が動かせないなどの理由で、耳がただれる褥瘡（床ずれ）を発症した入所者が、耳があたる部分に穴が開いた枕を使用しても、症状に改善が見られないケースに着目した。

体に垂直にかかる「体圧」と、平行の「ずれ力」が発症に関係しているとされていたが、昨年7月から、原因の再考や、具体的な再発予防策の検討を始めた。

1日の大半を寝たきりで過ごす20歳代の男性は、圧迫で右耳が赤くなりやすく、スタッフが頭を浮かせるなどの対応をしていた。調べると、頭部に体圧はかかっていなかったが、呼吸障害によるずれ力が大きいことが分かり、体の両脇を支えるクッションを作製。ずれがなくなり、症状も治まった。

下半身に麻痺があり、右耳に褥瘡がある20歳代の女性のケースでは、男性とは逆に、ずれはないが体圧が高いことが判明。膝下に三角形のクッションを入れたところ、頭や手が動かしやすくなり、再発しなくなったという。

チームでは、重度の障害がある人特有の呼吸運動や、筋肉の収縮などが褥瘡発症に影響しているとし、一人一人の原因を調べ、個別に対応することが重要だと結論づけた。

町田さんは「理学療法士の視点から、入所者の生活の質の向上につなげられた。日常的に接している看護師などのスタッフと連携し、情報を共有した上で、みんなで対策をたてていきたい」と意欲を見せた。